

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 29 日現在

機関番号：25406

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25580132

研究課題名(和文)日本語母語話者のための英語音声共通参照枠の構築

研究課題名(英文)Development of a CEFR-based Framework for Teaching and Learning English Sounds in Japan

研究代表者

上斗 晶代 (Joto, Akiyo)

県立広島大学・人間文化学部・教授

研究者番号：60196665

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本語話者のための英語音声段階別到達度指標(聞き取り・発音)を設定することを目的とした。英語音声教育に関するアンケート調査、教科書分析、学習者の英語音声の分析、先行研究や文献を通じて、10段階の全体的尺度の草案をCan Do記述文で表した。低次の段階では、既習の語における基本的な母音・子音の区別、短い語や文のリズムと文タイプに応じた基本的イントネーションの聞き取りと発音が可能であろう。日本人学習者に困難な母音や子音、子音連結、音変化、機能語の弱形、気持ちや状況に応じたイントネーションによる表現や聞き取りは高次の段階で可能であり、段階を追って長期的スパンで習得する項目となる。

研究成果の概要(英文)：This study aims to develop proficiency guidelines for the perception and production of English sounds for native speakers of Japanese. Through a questionnaire survey of English sound education, an analysis of English textbooks and English sounds produced by Japanese learners, and previous studies, a global scale of the guidelines was drafted in Can Do descriptors on ten different levels of proficiency. Learners at the lower level could hear and pronounce the difference in basic vowels and consonants in learned words, rhythms in short words and sentences, and the basic intonation of limited sentence types. Learners could achieve proficiency at a higher level, step by step, over the long term in the phonological items such as the segmental sounds which Japanese learners have difficulty perceiving and producing, consonant clusters, sound change, weak forms of function words, and intonation in context or according to the speaker's attitude.

研究分野：英語音声学

キーワード：英語音声教育 日本語話者 CEFR CEFR-J 英語音声到達度指標 Can Do記述文 共通参照枠 英語音声指導

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究代表者と分担者は、これまでの日本人学習者の英語音声の特徴分析の研究や、音声教育を通じて、英語音声の効果的な習得には、自律的学習者の育成が必要であることと、それを可能にする学習段階に応じて継続的、かつ自律的に学習できるようなガイドラインが必要であることを認識するに至った。  
 (2) 欧州では 2001 年に発表された「ヨーロッパ言語共通参照枠」(CEFR)により、言語の4技能について6段階の到達度指標が示されたが、音声については簡素な記述のみである。また、日本では12段階の英語到達度指標(CEFR-J)が発表されたが(投野, 2013)、音声の指標は設定されていない。このように、英語音声の学習段階別到達度指標は未整備であるため、その構築が必要となっている。

2. 研究の目的

日本語母語話者を対象とした英語音声の学習と指導のための段階別到達度指標(ガイドライン)を構築することを目的とする。具体的には以下のことを目指す。

- (1) 英語音声の聞き取りと発音の各能力について、段階的学習レベルの設定を行い、各レベルの到達度を Can Do 記述文で明記する。そして、CEFR のレベルへの対応を検討する。(指導・学習のためのガイドライン構築)
- (2) 英語音声指導者・学習者のためのポートフォリオを作成する。

3. 研究の方法

(1) 英語音声学習と指導の実態を把握し、音声到達度指標設定とポートフォリオ作成の資料とするため、小学校から大学までの英語教育に携わる教員、及び英語学習者(大学生以上)、社会人を対象とする英語音声に関するオンラインアンケート調査を実施した。

(2) 分節音・超分節音の音声項目における到達度指標を具体的に記述するため、現行の小学校英語活動、中学・高校で使用されている英語テキスト、辞典、及び CEFR-J Wordlist Version 1.0 (投野, 2013) を利用して、出現頻度の観点から音声項目の分析を行った。

(3) 聞き取りと発音の難易度を把握するため、本研究グループの研究者による先行研究の成果や他の先行研究結果を分析した。

(4) 子音連結、子音脱落、単語間連結、同化については、先行研究で明らかにされていない部分があるため、日本人学習者の英語音声を収録し、分析した。また、中学生を対象としたイントネーションの指導と学習についての実験的研究を行った。

4. 研究成果

(1) CEFR, CEFR-J、及び小・中・高校の学習指導要領などを参考にして、英語音声到達度指標の全体的尺度(案)を10段階で設定した。「英語音声共通参照枠(全体的尺度)」として表1に示す。

表1 英語音声共通参照枠(全体的尺度)

レベル		全体的尺度 (Global Scale)	
		聞きとり	発音
CEFR	CEFR-J		
C2	C2	英語母語話者の速いスピードの英語の音声聞きとることができる。非英語母語話者の英語音声、英語母語話者の標準的な音声、非標準的な音声(方言など)の違いを聞き分けることができる。イントネーションが表現するニュアンスの違いが理解できる。自分の英語音声を客観的にとらえることができる。	明瞭で自然な発音ができる。日本語訛りはほとんどない。自らの偶発的な発音の違いをその場で正すことができる。イントネーションによるニュアンスの違いなど、自分の気持ちや文脈に応じた音声表現ができる。
C1	C1	英語母語話者の速いスピードの英語の音声聞きとることができる。イントネーションによるニュアンスの違いが理解できる。非英語母語話者の英語音声と英語母語話者の音声の違いを聞き分けることができる。自分の英語音声を客観的にとらえることができる。	明瞭で自然な発音ができる。日本語訛りはほとんどない。自らの偶発的な発音の違いをその場で正すことができる。イントネーションによるニュアンスの違いを表現できる。
B2	B2.2	自然な速さで発音された英語母語話者の標準的な音声聞きとることができる。非英語母語話者による外国語訛りの少ない英語音声を聞きとることができる。自分の英語音声を英語母語話者の音声と比較しながら、客観的にとらえることができる。	日本語訛りが少なく、十分理解できる発音である。自然なイントネーションや強勢により、自分の意図や文脈に応じた音声表現できる。
	B2.1	自然な速さで発音された英語母語話者の標準的な音声聞きとることができる。外国語訛りが非常に少ない非英語母語話者の英語音声を聞きとることができる。	発音の違いや聞き手から繰り返しを求められることが少なく、大体理解できる発音である。自分の意図や文脈に応じて、ほぼ自然なイントネーションや強調による発音ができる。
B1	B1.2	英語母語話者が自然な速さで、はっきりと発音した標準的な音声聞きとることができる。話者の意図や文脈に則して発音された音声の変化や違いを聞き分けることができる。	日本語訛りが少しあるが、未知の単語においても発音記号を基に大体理解できる発音ができる。イントネーションや強調によって、ある程度文脈の意図や文脈に応じた発音ができる。
	B1.1	英語母語話者がゆっくり、はっきり発音した標準的な音声聞きとることができる。英語音声の特徴やルールを理解し、それらを用いて聞きとることができる。	日本語訛りや発音の間違いがときどきあるが、大体理解できる発音である。英語音声のルールを適用しながら発音できる。イントネーションや強調によって、ある程度文脈に応じた発音ができる。
A2	A2.2	既習、未習の単語や表現について、英語母語話者がゆっくり、はっきり発音した標準的な音声聞きとることができる。基本的なイントネーション、強勢、音変化、区切り方の特徴やルールを理解して、それらのある程度適用しながら音声を聞きとることができる。	既習の単語や表現の発音は日本語訛りはあるが、大体理解できる発音である。未知の単語は、日本語訛りや発音の間違いや日本語訛り、ぎこちなさが目立つ。難しい発音は、繰り返しを求められることがある。基本的なイントネーション、強勢リズム、文アクセント付与や音変化のルールを理解して、それらのある程度適用しながら未習の表現を発音することができる。
	A2.1	既習の単語や表現について、英語母語話者がゆっくり、はっきりと発音した標準的な英語音声を聞きとることができる。話者の意図や文脈による基本的なイントネーションや文アクセントを聞きとることができる。	既習の単語や表現であれば、日本語訛りはあるが、大体理解できる発音である。日本語話者にとって難しい発音は、繰り返しを求められることがある。英語音声に関する基本的な知識に基づき、基本的なイントネーションや強調により、ある程度文脈に応じた表現できる。
A1	A1.3	既習の単語や表現について、英語母語話者がゆっくり、はっきりと発音した標準的な英語音声を聞きとることができる。既習の表現における基本的なイントネーションパターンや強勢パターン、文アクセント、音変化を聞きとることができる。	既習の単語や表現について、日本語訛りはあるが、理解できる程度に発音できる。日本語話者の英語に慣れている聞き手から繰り返しを求められることがときどきある。基本的なイントネーション、強勢リズム、文アクセント付与や音変化のルールを理解し、それらのある程度応用して既習の表現を発音できる。
	A1.2	既習の単語や表現について、英語母語話者がゆっくり、はっきりと発音した標準的な英語音声を聞きとることができる。既習の表現における基本的なイントネーションパターンや強勢パターン、文アクセント、音変化を聞きとることができる。	既習の単語や表現について、日本語訛りには慣れている人であればなんとか理解できる程度に発音できる。日本語訛りに慣れていない聞き手からは繰り返しを求められることがよくある。既習の単語や表現について、基本的なリズムやイントネーションで発音できる。
	A1.1	既習の単語や表現について、英語母語話者が注意深く、ゆっくりと、はっきりと発音した標準的な英語音声を聞きとることができる。基本的なリズムパターンやイントネーションパターンの日本語訛りや表現の違いを聞きとることができる。	既習の単語や表現について、日本語訛りには慣れている人であればなんとか理解できる程度に発音できる。日本語訛りに慣れていない聞き手からは繰り返しを求められることがよくある。既習の単語や表現について、基本的なリズムやイントネーションで発音できる。
Pre-A1		既習の単語や表現について、英語母語話者が注意深く、ゆっくりと、はっきりと発音した標準的な英語音声を聞きとることができる。基本的なリズムパターンやイントネーションパターンの日本語訛りや表現の違いを聞きとることができる。	既習の単語や表現について、日本語訛りには慣れている人であればなんとか理解できる程度に発音できる。日本語訛りに慣れていない聞き手からは繰り返しを求められることがよくある。既習の単語や表現について、基本的なリズムやイントネーションで発音できる。

(2) 分節音、超分節音それぞれの領域について、各段階に対応した具体的な記述を試みた。アンケート調査、教科書分析、学習者の音声分析の結果などに基づき、日本人学習者の英語音声の特徴を踏まえながら考察した。

分節音について

教員に対する英語音声教育アンケート調査では(有効回答数:平成28年3月31日現在で、小学校32、中学校35、高校43(中等教育学校を含む)、大学(高専、短大を含む)68)母音・子音に関する質問項目21のうち、指導する学習者のおよそ半数以上が発音できていると回答した教員数が50%以上であった項目は、小学校では皆無だが、中学、高校、大学ではそれぞれ5項目(/i:/-/ei/, /æ:/-/ʌ/, /r:/-/l/, /s:/-/ʃ/, /θ:/-/s/の区別)、1項目(/i:/-/ei/),7項目であった。小~高校まではできないが、大学ではできる発音は、/ə:/-/ɑ:/ (shirt-star), /ɑ:/-/ʌ/の区別

(watch-monkey) , /r/-/l/(right-light)の区別であった。

学生へのアンケート結果によると、大学1・2年生 86人中 50%以上が発音できると回答した項目は、/i:/-/ei/ (eat-eight)の区別、弱母音/ə/(teacher) , /θ/-/s/(thank-six)の区別の3項目であった。大学3・4年生 25人中 50%以上が発音できるとした項目は、上記に加えて/æ/-/ʌ/(bat-cup) , /ɑ/-/ʌ/ , /ɑ:/-/ɑə/ , /oʊ/-/ɔ:/ (boat-ball) , /r/-/l/ , /s/-/ʃ/(sea-she)の区別、高舌後母音に先行する/w/ (woman) , /f/ (food)であった。大学院生 15名のアンケート結果では、小～大学までできない音声項目のうち、氣息音を伴う無声閉鎖音 (pen, ten, car) は 50%以上が発音できると回答した。しかし、弱母音/ə/については大学院でも肯定的回答が 50%に満たなかった。

さらに、社会人のうち日英語通訳者 6名 (C1, C2 レベル相当)のアンケート結果では、/i:/-/i/ (eat-it) , /u:/-/u/ (school-book)の音質的区別について否定的回答が 66.7%であったが、これら以外は全ての項目で 50%以上が発音できるとの回答であった。これら2項目については小～大学院においてもできない項目であり、日本人学習者にとっては発音困難な音であると考えられる。また、山田・足立(1998)によると、英語母音/i/ , /u/に対する日本人の聞き取り正答率はそれぞれ 37.0% , 56.4%で聞き取り困難な音である。

分節音は、学習段階が進むに従い、学習者が習得する音が増えるが、上級者においても一部の音については習得が困難であるようだ。分節音全てを習得するためには長期的スパンでの学習が必要と考えられる。

高頻出の音は習得率が高いという理論的観点から、教科書に出現する語彙と CEFR-J Wordlist の A1～B2 の語彙中の母音・子音の出現頻度を分析した。その結果、小学校英語活動 (Pre-A1 に相当) で使用されているテキスト (Hi, friends! 1, Hi, friends! 2) には、ほとんど全ての英語音が出現することがわかった。強音節における母音は出現頻度の高い順番に /ɛ/(pet) , /i:/ , /ai/ (hi) , /i/ , /ʌ/ , /æ/ , /ei/ , /u:/であった (出現率 5%以上) 。また、強音節頭の子音においては /t/ , /s/ , /f/ , /w/ , /k/ , /l/ , /m/ (出現率 5%以上) であった。母音については、上記の音と /ɑ:/ (father) , /oʊ/ は、A1 , A2 , B1 , B2 レベルの語彙においても高頻出の強音節の母音であった。子音は、上記の音と /h/ , /p/ , /b/ , /r/ が A1～B2 においても高頻出であった。しかし、アンケート調査によると、日本語にない英語母音・子音を区別して発音するのは児童にとって難しいとする小学校教員は 67.8%と多く、これらの音は Pre-A1 レベルの小学校児童にとっては習得に至らないものが多いと考えられる。日本語音と全く同様に発音される英語音はないが、英語学習入門期の Pre-A1 においては、高頻出の音の中

で比較的日本語音に近い音で、日本人にとって比較的困難でない基本的な音について聞き取りと発音ができるとするのが適当であろう。母音では、例えば /i:/ , /ɛ/ , /u:/ , /ai/ , /ei/ など、子音では、氣息音を伴わない場合の無声閉鎖音、/s/ , /m/ などであろう。

子音連結について、小学校英語活動の教科書には 4 子音連結まで出現するが、高頻出順に /nt/ , /tw/ , /st/ , /nd/ , /ts/ (出現率 4%以上) であった。/nt/ , /st/ , /nd/ は A1～B2 においても高頻出の子音であった。しかし、アンケート調査結果においては、50%以上の小学校から高校の教員が子音連結の発音は児童・生徒にとって難しいとしており、半数以上の学習者が語末子音や子音間に母音を挿入すると回答している。語末子音や子音間の母音挿入は大学生においても半数以上みられるとの回答であった。学生対象のアンケート結果では、子音連結に関する 2 つの質問項目において、大学 1・2 年生は 50%以上が否定的回答であったが、大学 3・4 年生の 50%以上の肯定的回答は 1 項目のみ (please, little) で、大学院生は 2 項目とも (上記と street, dream) 60%が肯定的回答であった。また、通訳者へのアンケート結果では、83.3%が子音連結の発音は易しいとしており、子音連結に関する 2 つの質問項目とも全員できると回答した。

高校・大学 1 年レベルの学習者が発音した子音連結の音声分析の結果、発音できた率は 47.0% (高校 50.0% , 大学 40.0%) であった。語頭の子音連結 (21.2%) は語末 (59.8%) や語中 (27.3%) よりも困難であり、その原因は母音挿入であることがわかった。

以上より、子音連結の難易はその種類と語中での位置に関係するが、全体的には日本人学習者、特に Pre-A1～B2 (B2.1) レベルにとっては難しいといえる。B2.2 レベル (大学卒業相当) 以上で比較的安定した発音が可能となろう。長期的スパンでの習得項目である。Pre-A1 では、語中、語末の 2 子音連結 /nt/ , /nd/ (調音点が同一) や /ts/ (日本語に存在) は母音挿入が起こりにくいため、発音できると考えてよいであろう。

#### 超分節音について

教員へのアンケート結果によると、50%以上の教員が、およそ半数以上の学習者が発音できると回答した項目は小学校においては皆無であった。中学から大学までの全ての校種で発音できると回答した項目は、「語強勢」、「文タイプによる基本的イントネーション」、「Wh 疑問文の下降調イントネーション」、「選択疑問文のイントネーション」、「同化 (高頻出)」、「子音脱落」である。高校・大学のみ 50%以上の肯定的回答があった項目は「区切り」であった。大学のみ 50%を超えた項目は、「文脈に応じた文中の強調」、「リズム」、「機能語の発音 (強形・弱形)」、「2 単語間連結」であった。

学生へのアンケート結果では、大学 1・2 年生の 50%以上が肯定的回答をした項目は、「文タイプによる基本的イントネーション」、「Wh 疑問文の下降調イントネーション」、「区切り」、「同化(高頻出)」であった。大学 3・4 年レベル以上で発音できる項目は上記に加えて、「語強勢」、「選択疑問文のイントネーション」、「文脈や気持ちに応じた文中の強調」、「気持ちに応じたイントネーション」、「単語間連結」、「内容語・機能語の発音の区別」、「子音脱落」であった。

大学院生と通訳者においては超分節音に関する全ての項目で発音できるとの回答であった。大学まで否定的回答であったが、大学院以上で肯定的回答があった項目は、「気持ちや状況に応じたイントネーション」、「下降上昇調の使用」、「音調核の表現(文頭に核がある場合)」、「リズム」、「機能語の発音(強形・弱形)」であった。これらの項目は B2.2 以上のレベルで発音できると考えて良いであろう。リズムや機能語の発音の実現には弱母音の習得が必要であり、適切なイントネーションの実現にはピッチとストレスのコントロールの習得が必要である。これらは長期的スパンでの習得となる。

小学校英語活動の教科書分析の結果、語強勢については、単音節語の出現頻度が最も高く(53.5%)、次いで 2 音節語(23.9%)の第 1 音節(77.0%)、3 音節語(18.1%)の第 3 音節(50.0%)、4 音節語(4.0%)の第 2 音節が第 3 音節(28.8%)、5 音節語(0.3%)の第 4 音節(50.0%)が第 1 強勢となる頻度が高いことがわかった。アンケート調査では、児童が語強勢の発音ができると回答した教員は 50%に満たなかったが、Pre-A1 レベルでは、全体の 95.7%を占める 1 から 3 音節までの既習語について出現頻度の高い強勢パターンで発音することが可能であろう。

Pre-A1 レベルのリズムについては、教科書分析によると、2 つのリズムユニットで構成される文が最も多く(57.5%)、次いで 3 リズムユニット(18.9%)、単一リズムユニット(16.5%)、4 リズムユニット(5.1%)、5 及び 6 リズムユニット(0.9%)、7 リズムユニット(0.1%)となっている。全体の 93%を占める 1 から 3 リズムユニットの既習の文について、強弱リズムで発音することが可能と考えられる。但し、強音節・弱音節の母音の音質的区別の習得はこのレベルでは困難と思われるため、例えば母音の長さの違いなどで強弱を表現することになる。

文アクセント(音調核、文中の強調・焦点)については、教科書の総センテンス数 913 の内、99.8%が文中最後の強勢のある音節に付与される(末尾焦点)。つまり、文脈に依存しないタイプのアクセント付与である。

イントネーション(核音調)については、教科書に出現する 5 種類の文(平叙文、疑問詞疑問文、命令文、列挙文、Yes-No 疑問文)のうち平叙文が 64%を占め、下降調で発音さ

れる。次いで下降調の疑問詞疑問文(約 18%)、下降調の命令文(約 10%)となっている。このように、下降調がおよそ 92%を占めていることから、Pre-A1 においては、既習の平叙文、疑問詞疑問文、命令文について下降調のイントネーションが発音可能と考えられる。

適切なイントネーションを実現するためには、文アクセントの位置(音調核)の決定と聞き取りが極めて重要である。異なる文脈における文中での音調核の位置について、中学 1 年生から 3 年生の計 76 人を対象に指導を行った後、音調核の位置を聞き取るテストを実施した。その結果、どの学年においても 70%以上の正答率を示した(全体平均: 71.8%)。2 年生が最も正答率が高かった(77.8%)。このことは、A1 レベル(中学 1、2 年生に相当)において、文アクセント付与(音調核の位置決定)についての明示的指導と学習が可能であることを示している。

英語の音変化のうち、単語間連結と同化について、小学校英語活動の教科書分析を行った結果、それぞれ 2%、1%という低い出現頻度であった。“Thank you”(サンキュー)のような日本語でも連結した形での使用が定着している表現は Pre-A1 レベルで発音可能であろう。また、会話において同化した形でよく使用される表現(would you や meet you)においては、同化の発音が可能であろう。

単語間連結、同化、子音脱落について、高校 1 年と大学 1 年レベルの日本人学習者各 10 人、計 20 人の英語音声を録音し、音響分析した。その結果、単語間連結、同化それぞれにおける発音率(音変化させて発音した率)は 29.9%、26.3%と低く、音変化する個所を認識している率(認識率)もそれぞれ 31.1%、34.4%と低かった。両音変化とも発音率と認識率の間に相関がみられた。学年による有意差は発音率にも認識率にもみられなかった。このことは、英語の学習段階が進んでも音変化についての知識の不足が要因の一つとなって、適切な発音ができていないことを示している。学習の早い段階で明示的、継続的指導が必要であろう。また、両音変化とも難易差があり、同化では /d-j/ /dʒ/ (would you)、/t-j/ /tʃ/ (meet you)は両学年ともに発音率が比較的高かった(それぞれ 95%、55%)が、/t-j/ /tʃ/ (write your)、/s-j/ /ʃ/ (this year)は共に 0%であった。単語間連結では、“come-on”や“it's-a”などは両学年とも高い発音率(95%)であったが、“here-is”(0%)、“when-is”(0%)、“at-all”(10%)など、/r/連結、/n/連結、/t/連結などは難度が高い連結であることがわかった。

子音脱落の発音率は、高 1(35%)、大 1(20%)共に低かった(全体平均 28%)。この原因は子音間の母音挿入である。/t/連結など、一部の単語間連結においても子音の後に母音挿入があるため連結の障害になっていることがわかった。

## 英語音声教育の実態

小学校から大学の教員へのアンケート調査結果より、英語の授業で発音指導を「毎回」「しばしば」行っている教員が50%以上であるのは中学校であり、その率は高校、大学では30%程度に下がる。小学校では25%である。各校種とも「時々」行う率が最も高かったが、効果的な音声習得のためには学習入門段階からほぼ毎回の指導が不可欠であろう。

音声中心の英語活動が行われている小学校で発音指導があまり行われていない背景には、教員側に英語音声に関する基礎知識がない(65.7%)、発音に自信がない(77.2%)、従って発音指導に自信が持てない(68.7%)という現状があるようだ。高校・大学は50%以上の教員が知識も自身の発音に自信もあり、指導の自信にも自信があるが、発音指導があまり行われていないのが実情である。

以上の現状を踏まえて、教職課程の学生を含めた指導者用の「英語音声指導ポートフォリオ」を作成した。今後、「英語音声学習ポートフォリオ」、及び「英語音声指導ガイド」を作成する計画である。これらは到達度指標とともに、本研究のホームページ「日本語母語話者のための英語音声学習および指導の指標」に掲載することとしている。

ここに提示した到達度指標は現時点での案であり、今後研究を重ねて修正していく予定である。アンケート調査はまだ十分な回答数を得られていないが、HPなどを活用しながら引き続き調査を実施し、到達度指標の改善に役立てる予定である。

### <引用文献>

投野 由紀夫, 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック, 大修館書店, 2013  
山田恒夫, 足立隆弘, 英語リスニング科学的上達法, 講談社, 1998

### 5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計10件)

三宅 美鈴, 上斗 晶代, 西尾 由里, 小学校における英語音声指導に関する実態調査, 日英言語文化研究, 第5号, 2016, 印刷中, 査読有

Yusuke Shibata, Masaki Taniguchi, Tamikazu Date, Teachability and Learnability of English Tonicity for Japanese Junior High School Students, Proceedings of Phonetics Teaching and Learning Conference 2015, No. 1, 2015, pp. 83-86, 査読有,  
[https://www.ucl.ac.uk/pals/study/cpd/cpd-courses/ptlc/proceedings\\_2015/P TLC2015.pdf](https://www.ucl.ac.uk/pals/study/cpd/cpd-courses/ptlc/proceedings_2015/P TLC2015.pdf)

島岡 丘, 二項対立と SKT, IRICE PLAZA, 第26号, 2015, pp. 90-95, 査読有

上斗 晶代, 日本語母語話者の生成による英語の同化と単語間連結の特徴 英語音声共通参照枠の構築に向けて, Persica, No.42, 2015, pp. 33-44, 査読有

Masaki Taniguchi, Yusuke Shibata, Features of Japanese Learners' English Consonant Clusters and Elision: Towards the Development of a Common Japanese Framework of Reference for English Sounds, 英語音声学, 第19号, 2014, pp. 77-81, 査読有

[学会発表](計35件)

Yuri Nishio, Akiyo Joto, A Self-assessment Grid for English Sounds for Japanese Learners at Level Pre-A1 of the CEFR-J, American Association for Applied Linguistics 2016 Annual Conference, 2016年4月11日, Orlando (U.S.A.)

Akiyo Joto, Proficiency Guidelines for English Sounds at Level B2 of the CEFR-J, American Association for Applied Linguistics 2016 Annual Conference, 2016年4月10日, Orlando (U.S.A.)

上斗 晶代, 日本語話者のための英語音声指導用ポートフォリオの提案, 2015年度日本英語音声学全国大会, 2015年11月7日, 呉工業高等専門学校(広島県・呉市)

西尾 由里, 上斗 晶代, 三宅 美鈴, 小学校英語教育のための音声共通参照枠の提案 音声教育に関するアンケートと小学校英語教科書の音声分析に基づいて, 大学英語教育学会第54回国際大会, 2015年8月31日, 鹿児島大学郡元キャンパス(鹿児島市)

市崎 一章, 上斗 晶代, 高校英語の語彙を対象とした音構造の分析 英語音声共通参照枠作成に向けて, 全国英語教育学会第41回熊本研究大会, 2015年8月23日, 熊本学園大学(熊本市)

上斗 晶代, 西尾 由里, 三宅 美鈴, 英語学習入門期における発音到達度指標の提案 日本人のための「英語音声共通参照枠」の構築に向けて, 第15回小学校英語教育学会広島大会, 2015年7月26日, 広島大学(広島県・東広島市)

上斗 晶代, 英語学習中期段階における発音到達度指標の提案 日本語母語話者のための「英語音声共通参照枠」の構築

に向けて , 第 46 回中国地区英語教育学会研究発表会, 2015 年 6 月 27 日, 鳥取大学 (鳥取市)

上斗 晶代, 英語学習初期段階における発音到達度指標の提案 日本語母語話者のための「英語音声共通参照枠」の構築に向けて , 大学英語教育学会中国四国支部 2015 年春季支部研究大会, 2015 年 6 月 6 日, 広島工業大学 (広島市)

三宅 美鈴, 小学校英語教育における音声指導に関するアンケート調査結果報告と音声指導ガイドラインの提案, 2014 年 6 月 28 日, 青山学院大学 (東京都・渋谷区)

島岡 丘, 市崎 一章, 小学校における英語教育 英語音声教育に関する全国規模調査に基づいて , 第 40 回全国英語教育学会徳島研究大会, 2014 年 8 月 10 日, 徳島大学 (徳島市)

上斗 晶代, 西尾 由里, 日本語話者のための英語音声共通参照枠の構築: 全体的尺度, 第 28 回日本音声学会全国大会, 2014 年 9 月 27 日, 東京農工大学小金井キャンパス (東京都・小金井市)

上斗 晶代, 日本の英語音声教育に関する実態調査: 「日本語母語話者のための英語音声共通参照枠」構築へ向けての中間報告 第 53 回大学英語教育学会国際大会, 2014 年 8 月 29 日, 広島市立大学 (広島市)

上斗 晶代, 市崎 一章, 日本人学習者の生成による英語音変化の特徴 英語音声共通参照枠の構築の構築に向けて , 日本英語音声学会第 19 回全国大会, 2014 年 6 月 7 日, 大分県立看護科学大学 (大分市)

市崎 一章, 伊達 民和, 英語音声に関する学生対象アンケート調査 英語音声指導・学習ポートフォリオ作成に向けて , 日本英語音声学会関西・中国支部第 16 回研究大会, 2014 年 5 月 10 日, 龍谷大学大阪梅田キャンパス (大阪市)

上斗 晶代, 英語音声に関するアンケート調査 英語音声共通参照枠の構築に向けて , 第 21 回日本英語音声学会中部支部大会, 2014 年 3 月 1 日, 愛知学院大学大学院栄サテライトセンター (名古屋市)

〔図書〕(計 2 件)

島岡 丘 他, 南雲堂, Life Topics: Deeper Connections, 2015, 92

西尾 由里 他, 高橋美由紀・柳善和(編),

ジアース教育新社, 小学校英語教育 授業づくりのポイント , 2015, 254

〔産業財産権〕  
出願状況 (計 0 件)  
取得状況 (計 0 件)

〔その他〕  
ホームページ等  
「日本語母語話者のための英語音声学習および指導の指標」  
<http://english-sound-guideline.jp>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

上斗 晶代 (JOTO, Akiyo)  
県立広島大学・人間文化学部・教授  
研究者番号: 60196665

### (2) 研究分担者

島岡 丘 (SHIMAOKA, Takashi)  
筑波大学・名誉教授  
研究者番号: 20015382

伊達 民和 (DATE, Tamikazu)  
プール学院大学・国際文化学部・名誉教授  
研究者番号: 50207271

谷口 雅基 (TANIGUCHI, Masaki)  
高知大学・人文社会・教育科学系・教授  
研究者番号: 90163633

西尾 由里 (NISHIO, Yuri)  
岐阜薬科大学・薬学部・教授  
研究者番号: 20455059

市崎 一章 (ICHIZAKI, Kazuaki)  
呉工業高等専門学校・准教授  
研究者番号: 70534288

### (3) 連携研究者

三宅 美鈴 (MIYAKE, Misuzu)  
広島国際大学・心理科学部・教授  
研究者番号: 50352034

田邊 祐司 (TANABE, Yuji)  
専修大学・文学部・教授  
研究者番号: 30127111

柴田 雄介 (SHIBATA, Yusuke)  
高知大学・全学教育機構・特任講師  
研究者番号: 90725673

### (4) 研究協力者

乾 隆 (INUI, Takashi)  
東京家政大学・人文学部・教授  
研究者番号: 20266539